

保育者養成課程の学生による食育カルタの制作と 保育所におけるカルタ遊びの実践

鳥居美佳子¹⁾ 古屋祥子¹⁾ 里見達也¹⁾ 山田千明²⁾

キーワード：科目間連携授業、カルタ、教育課程論、図画工作、食育

はじめに

2015年度までは、他領域科目の連携授業の中でカルタを制作し、全グループの制作物でカルタ遊びを行って自己相互評価をしてきた。他領域の科目間連携の意義が見いだされた一方で、今後の課題として、具体的な目的をもって連携を深める必要性があること、加えて、媒体としてのカルタの有用性を検討することを報告した^(註)。

2016年度には、幼稚園に協力を得て、年長児に授業で制作したカルタを用いて遊ぶ機会を設定した。読み手として協力いただいた副園長および主任から、カルタの内容について多岐にわたる助言があった。カルタ制作における課題として、絵札と読み札の関係や読み札の文言リズムの検討、視力の弱い幼児への配慮、「愛情たっぷりお弁当」といった表現に心を痛める幼児への配慮などが挙げられた。また、繰り返して遊ぶ特性を活かし、言葉を楽しんだり、知識を豊かにしたり、多様なカルタがあるとよいという指摘もあった。さらに、カルタ遊びにおける幼稚園教諭と園児の関係を観察した結果、読み手の関わり方により、カルタ遊びの質が変わることが明らかになり、カルタ制作時の留意事項と同時に読み手の関わり方も重要な検討事項であると考えた。

このような検討事項に対して、カルタ遊びの活動のねらいや読み手としての関わり方を授業計画にどのように盛り込んでいくかが課題となる。隈元(2009)は、授業設計をはじめ教材分析や教科指導の在り方、指導案の作成、模擬授業への実践を通して、特に指導案作成の手掛かりとなる模擬授業の提示の仕方の有効性について述べている。これによると、「教材分析が授業デザインに反映すること」や「学習指導案が発問や板書計画、ノート指導と密接に連動していること」が示唆された。また、「授業分析の内容を、構造的に板書や発問計画に取り入れたことで、問題解決的な学習の効果」が確認された。また、田宮(2009)は、現職教員の授業の様子をビデオで視聴させ、それをもとに学習指導案としてまとめる演習を行っている。これによると、授業記録や学習指導案作成を試みさせることで、その難しさを体験し、重視すべき視点や授業を計画するための必要な取り組みなどに気づかせる効果があると述べている。さらに、智原・下口(2012)は、保育者を目指す学生が保育の現場での実践力を習得するには、保育者養成課程における授業科目の枠を超えた実践活動への取り組みが重要であることを、「図画工作」と「幼児体

(所 属)

1) 山梨県立大学 2) 埼玉県立大学

育」の授業実践の報告から述べている。このようなことから、指導案作成も科目連携に大いに役立つことが予想される。

そこで今回、あらたに「教育課程論（就学前）」という科目を加えた科目間で連携し、保育所でのカルタ遊びの計画、媒体としてのカルタ制作、カルタ遊びの実施、振り返りを行った。その成果を検討し報告する。

1. 連携授業の方法

(1) 研究協力者と倫理的配慮

研究協力者は関東甲信越地方の大学の保育者養成課程に在籍する2年生、31名である。学生には、同意が得られた学生のみ振り返りの記述内容を研究に活用、振り返りの記述については個人が特定できないよう特段の配慮した上で公表、一旦研究に同意しても疑義があれば途中で振り返りの記述内容を研究に提供することの中止等、倫理的配慮について文書および口頭にて説明した上で同意書をとった。また、カルタ遊びの実践の協力施設には活動目的および方法について文書および口頭にて説明した上で同意書をとった。

(2) 導入

はじめに、連携授業の目的を説明した。次に、過去の授業で制作されたカルタを使ってカルタ遊びを体験した。

その後、「教育課程論（就学前）」担当教員は、今回の連携に当たって、他の科目で制作した媒体を実践に用いる際に必要な具体的な指導計画について、「教育課程論（就学前）」で培った指導案作成のポイントを押さえて構想していくことの重要性を説明した。「図画工作科基礎」担当教員は、制作課題の内容（カルタ読み札と取り札、カルタの取扱説明書、カルタ収納箱の3つ

をつくること）や使用する画材や道具について説明があり、カルタをデザインするにあたって注意すべきポイント（札のサイズや形、文字のレイアウトや色使い、絵柄の効果や読み札と取り札の特性の違いへの考慮等）についてレクチャーした。そして、「子どもの食と栄養Ⅰ」担当教員は、カルタのテーマ設定に必要な「幼児期に育てたい“食べる力”」や「食育における5つの子ども像」の説明、食品成分表などを活用した情報収集や吟味の方法について説明した。2015年度同様に、「子どもの食と栄養Ⅰ」の授業で「食事バランスガイド」を用いて望ましい食事のととのえ方に関する説明を行ったが、「教育課程論（就学前）」で指導計画を行うため、2015年度には取り上げた「保育における食育の計画」に関しては、説明を行わなかった。なお、対象学生は、1年次で「保育内容（言葉）」を履修済みであり、カルタ制作を経験したことがある。今回、食育カルタ制作に先立って、「保育内容（言葉）」に関する指導はなかった。

続いて、2016年度の幼稚園でのカルタ遊びの様子を画像で示し、幼児がカルタ遊びに夢中になる様子や絵札や読み句に対する反応（世界地図が保育室に掲示されており、世界の料理をテーマにしたカルタに興味を持った事例など）や読み手の関わり方（「○○って、知ってる？」といった言葉がけ、お手付きへの対応、取れない子への配慮など）について紹介した。

(3) 指導案立案・修正

年長児3グループ、年中児2グループ、計5グループに分かれて、対象児を決め、カルタ遊びのための「実習指導案」を作成した。指導案は、対象クラスの主活動のテーマ、主活動のねらい、時間配分、環境構



図1 保育所での実践前に学生間で模擬保育を行う様子

成・準備、予想される園児の活動、実習生の活動・留意点、評価のポイントから構成される。その中でも特に、園児が楽しく活動できるように、主活動のねらいやそれに伴う「導入-展開-まとめ」、環境などの構成を意識して、「実習指導案」作成にとりかかった。

なお、各グループの指導案に対しては、作成するごとに担当教員がコメントし、修正を行いながら作り上げていく方針をとった。

(4) 食育カルタ制作

「図画工作科基礎」および「子どもの食と栄養Ⅰ」の授業7コマを制作に充てた。授業内では完成することができず時間外にも制作するグループが見られた。



図2 制作したカルタの自己相互評価を行う学生の様子



図3 2018年度に作成されたカルタ

(5) 食育カルタの内容

今年度は、図3のような5点が作成された。食育テーマの設定や言葉の選択、札や箱のデザインなど、それぞれのグループが工夫し、様々なカルタが完成した。表1に各食育カルタの特徴を記す。

(6) 食育カルタの発表と自己相互評価

すべてのグループが制作したカルタで遊び、自己相互評価を行った。評価には従来と同じ評価シートを用いた。評価の観点は各自で4つ考え、それぞれに対して4段階(A・B・C・D)で評価した。後日、自己相互評価の結果をまとめ、どのような観点においてどのような評価を得たか確認できる一覧表を各グループに返却した。返却後、「図画工作科基礎」および「子どもの食と栄養Ⅰ」の担当教員が評価結果についてコメントした。その後、伝わりにくいと感じた点や改善の余地があると指摘された点を受けて、カルタに改良を加えるグループも存在した。

表1 2018年度に制作されたカルタの特徴

グループ	タイトル	テーマ	対象	読み札の形状	取り札の形状	箱の形状	付属品	補助教材
1	やまなしたべものかるた	山梨県の食材	年長児	長方形(角丸)	正方形	富士山型のフェルト製巾着袋 各札を入れる内袋あり	なし	なし
2	にほんのたべものかるた	食べ物の3つのはたらき	年長児	正円	正円	スライド式横長長方形厚紙箱 各札を分けて収納できる	なし	フリップ(赤緑黄)
3	たのしくたべようごはんかるた	食事マナー	年中児	正方形	正方形	上開き横長長方形厚紙箱	なし	なし
4	たべものカルタ	食におけるオノマトペ	年中児	正円	正円	お弁当箱型厚紙フェルト箱 各札を分けて収納できる蓋付き内箱有	なし	なし
5	にほんおいしいものかるた	46道府県の食べ物	年長児	正方形	正円	上開き横長長方形厚紙箱 各札を分けて収納できる	日本地図	なし

2. 保育所でのカルタ遊びの実施

2018年7月31日に、5グループに分かれ、担当クラスでカルタ遊びの活動を実施した。主任と担任は活動に参加せず、観察と終了後にコメントするよう依頼した。

活動開始時、カルタ遊びのルールを知らず戸惑っている子どもも見受けられたものの、カルタ遊びを続けるうちに、次第にルールを理解して楽しむ子どもが増えた。一方、ルールを理解できずにお手付きをする

子どもや絵札を取れずにさみしがる様子を見せる子どもも見られた。特に、年中児は、まだ文字が読めない子どもが多かったため、子どもがお手付きを頻発し、絵柄を見て札を取る様子が多く見受けられた。さらに、絵柄で判断がつかない場合は、学生の顔を窺いながら「これかな?」といった表情で絵札を選んでいった。あるグループが付属品として制作した地図が子どもに人気があり、絵札を取った後に札の裏に書かれ



図4 保育所におけるカルタ遊びの様子

た番号を確認し地図に記された番号と一致させ、都道府県の位置の学習を積極的に楽しむ子どもの様子が見られた(図4右上)。

学生は、初めのうちは、緊張して声が小さかったり、子どもとの会話を続けるのが難しかったりして、静かなカルタ遊びとなっていた。子どもが楽しみ出すと、それに勇気づけられるように元気のよい声が出て、子どもとの会話も楽しめるようになっていった。ゲームとして絵札を取ることを競うだけでなく、カルタの内容に触れながら食に関する話題を子どもたちと共有して、楽しくコミュニケーションをとる手段としてカルタを活用できるグループが多かった。一方、お手付きをする子どもや絵札をなかなか取れない子どもに対しての対応に苦慮している様子も見られた。

活動観察後の主任から、「子どもたちが楽しめる活動であった」や「カルタの完成度が高かった」といった評価を得た一方、「お手付きに対するルールを徹底させた方がよい」や「子どもがとりやすいようなカルタの配置」、「子どもに伝わるような言葉を選んだ声かけの工夫」などの課題も指摘された。

3. カルタ制作とカルタ遊びの振り返り

保育所でのカルタ遊び実施後、カルタ制作とカルタ遊びの振り返りを行った。振り返りには、教員が作成した振り返りシートを用いた。まず、制作や指導案立案で工夫した点や他のグループで取り入れたい点、残った課題についてグループ単位でディスカッションし、振り返りシートに記入した。次に、各自でカルタ制作や保育所でのカルタ遊びの実践活動を通して新たに得た知識や技術、課題について振り返りシートに記入した。



図5 振り返りを行う学生の様子

今回の振り返りの特徴について、2015年度までの学生の振り返りとの比較を中心に、各領域の視点から述べる。

[指導案およびカルタ遊びの実践活動]

今回初めて「実習指導案」を立案する方法をとったため、2015年度までの学生の振り返りと単純に比較しにくいものの、各グループとも「指導案で工夫した点」について、「ねらい」や「準備物」、「説明」や「声かけ」などを意識して、展開することを心がけたようである。実践後の振り返りでは、「他のグループの工夫で取り入れたい点」について、「ねらい」や「視覚教材を活用した説明」といった「保育者の配慮」や「子どもが使いやすいようなカルタ」、「終わり方」などを工夫する余地があると反省している。この点については、2015年度までの学生も同様に「テーマや目的が明確にわかるカルタを見て、刺激を受けた」や「学習効果について課題」と記述されており、やはり「ねらい」がはっきり打ち出せたグループは展開もうまくいったと感じたようである。

また、2015年度までの学生の振り返りでも「表現のわかりやすさに対する工夫」が課題とされているが、今回の振り返りでは、より具体的に「視覚教材を活用した工夫」や「保育者の配慮」、「子どもが使いやすい

ようなカルタの工夫」などの視点も課題として認識したようである。

さらに今回は「年齢を担当するグループ どうして話し合いをして共通ルールを検討する方がよかった」や「終わり方」について、意識したグループもあった。この点は、2015年度までの学生の振り返りでは認められない点である。

[言葉]

2017年度より「言葉」の担当から外れた山田であるが、注で示した筆者らの研究(2017)を踏まえて比較検討するために、匿名性が担保された形で2018年度の活動の振り返りデータを分析した。筆者らの研究(2017)においては、「読み札の最初の言葉と絵札の絵が一致するものと異なるものでは、一致するものの方が幼児には取り易い」、「『世界の料理』のカルタの裏には各国の国旗が描かれていたが、年長児クラスの幼児達が国旗に興味をもっている時期だったので楽しさが倍増した」と「課題と展望」で言及したが、今年度の振り返りの工夫した点を見ると、「初めの文字を食べ物になるようにした」や「県の名前を読み札の裏に書いた」という記述があり、継続研究の意義が見出される。一方、残った課題として、従来も「語呂」についての言及があったが、今年度も「語呂がよくないものがあった」という記述があり、読み札作成にあたり、何度も声に出して語呂をよくする工夫が必要であることが分かったのではないかと考えられる。さらに、子どもにわかりやすいカルタとは、という観点から色々と悩んだ様子が窺える。今年度の学生も従来の学生同様、カルタ制作を通し、発達段階に応じたわかりやすい語彙や文章表現を用いる必要性について実感を伴って考える良い機会となったようである。

次に、今年度は、従来は触れられていないオノマトペについての言及があるのが目につく。工夫した点で「オノマトペを全体的に使用した」というグループがあり、残った課題として「オノマトペが少ない」と記載し評価しているグループがあった。オノマトペを多用したカルタができた経緯として、制作開始時にテーマを検討していたグループに対して、「子どもの食と栄養Ⅰ」担当教員が「五感を刺激する食育」として聴覚刺激があること、特に、食感覚を表すオノマトペの認知と食嗜好性(村上、2018)について情報提供したことがあった。そのグループの振り返りには、「読んだ札の食べ物を聞いてすぐ絵札を取る姿が見られた。読み札を最後まで聞いていない場面が多かった」と、子どもたちにオノマトペを含む読み句を十分に楽しんでもらえないことを残念に思う様子が記述されていた。

2018年度は、指導案を作成した上で実際に学生達が保育所でカルタ遊びの活動を行ったため、気づきも具体的で、深い学びができたことが振り返りから読み取れる。自分たちの日常生活の言葉使い(ら抜き言葉等)に気づき、保育者がモデルとなるべき存在であることを自覚した学生や「読み札のどこに食べ物を入れるかによって子どもたちがどこまで聞いてくれるかが変わってくる」という発見をした学生もいた。また、「カルタという形だけではなく『言葉』の面では、子どもと普段話すときにも『どうしたらうまく伝わるか』考えながら話すのに役立つ」「読み札よりも絵札を見て(子どもたちは)とっていたので、イラストで楽しみながら伝えることの大切さを感じた」というコメントもあった。

[造形活動]

制作における工夫点については、2015年度以前と今年度に共通して、カルタのコンテンツ、カルタの箱や形状、統一感、作業分担の4点にまとめることができる。カルタのコンテンツについては、「色合い」「絵柄」「文字の読みやすさ」などの平面デザインへの意識を示す具体的なワードが多く挙げられ、2次元的なビジュアルについての注意を意識して取り組んだ様子を示している。次いで「札の形」「箱のデザイン」といったプロダクトデザインへの意識を示す記述が多く、「統一感」「親しみやすさ」といった制作する際のキーワードが続いた。また、「文字を書く人を一人に決めた」など作業の分担についてコメントもあった。

次に、他のグループの工夫で取り入れた点については、今年度は箱や収納に関する記述が多く、特に素材や使いやすさ、コンパクト性について配慮の必要性を感じることが窺える。その他、札の裏面の活用についての記述もあったものの、色塗りや絵の質などの2次元的なビジュアルに関する記述がなかったことは、これまでの傾向とは異なる点であった。

残った課題および新たに見つけた課題については、箱の強度や収納性に関する記述、札の形状についての記述が多く、構造的なデザインへの問題意識が示された。また、札の色使いやレイアウト、絵柄や文字のわかりやすさ、取扱説明書のデザインについてなど、平面デザインに関する課題を感じたこともわかる。さらに、2014年の振り返りでもみられたグループ制作ならではの課題が今年度も挙げられ、学生間での連携やコミュニケーション不足など、仲間と協働していく難しさを感じた学生もいた。

全体を通し、統一感や文字と絵の balan

スの重要性、文字の読めない子どもに対する絵が果たす役割に気付くなどの学びがあったことは、2015年度以前と今年度とも同じであった。今年度の特徴としては、「子どもにとってわかりやすい絵を描きたい」というような子ども志向的コメントが増えたことであり、より適した教材を考える大切さを意識することができたと考える。発達に応じた教材の活用について、将来の職場での活用を意識した記述も見受けられた。その他、活動を通して学んだ具体的な事柄を今後の保育に活かしていこうという意欲を感じることができた。

[食育]

工夫した点として、前述した通り、これまでの活動を踏まえ、札の裏に解説を記載する工夫や初めの文字を食べ物になるよう読み句を考える工夫についての記述があった。一方で、食育に関する工夫について全く記述のないグループも存在した。

新たに得た知識について、今年度の特徴は、活動中の子どもの反応から得られた気づきが多かったことである。例えば、「子どもたちは思っているより食べ物の知識があることに気づいた」や「ほとんどの子が赤・黄・緑の食べ物の説明の理解に苦しんでいた」、「年中児は、食べたことのない食べ物も多くあることを知った」など、活動を通して把握できた子どもの食に関する知識の現状に関する記述が認められた。さらに、「おいしそうだったことを共有することで、全員が振り返ることができる」と学んだ」や「遊びながらだと楽しみながら自然に学ぶことができる」「短い時間の中でのカルタ遊びでも子どもたちに与える影響はとても大きい」という記述からは、保育者として、子どもの食にどのように関わるか考える機会となったことも窺えた。

2015年度までと同様に、制作の過程において、テーマに関する知識を挙げる学生も多かった。

残った課題や新たに見つけた課題については、「内容についてもっと深く知っておくべき」「読み札に食材や効果を書くべき」「絵札の裏に詳細を記入することでもっとわかりやすくなる」などがあった。カルタ遊びの活動を実践している際に、保育者の立場で実感したことを課題として認識したと考えられる記述である。一方、2015年度には、今後の授業や日常の食生活の中で食と栄養について学びたい内容が挙がっていたが、今年度は、自己の食生活を振り返る記述は認められなかった。全体的にカルタの内容や遊び方（指導方法）の修正に関する記述が多く、具体的には、「一緒に読み札を読んでもらうことで、さらに食べ物への理解を深めることができたのではないかと感じた」、「子どもたちが取った後、どんな料理なのかふりかえるとさらに子どもたちの印象に残ると考える」など、子どもへの知識の伝え方を課題として認識した学生が多いことがわかった。

4. 考察

保育所で子どもとカルタ遊びの活動を実践したことの意義について述べる。

第一に、学生の学びの到達点の変化が挙げられる。今回も、これまでと同様に、授業で完成した食育カルタで遊んだ後、自己相互評価を行い、その結果をフィードバックした。その後、改良を加えたグループが認められたのは、今回が初めてであった。これまで、カルタを完成させることが到達点になっていたが、今回は、保育所でのカルタ遊びの目的を達成することが到達点となったと考えられよう。

第二に、学生が教材としてのカルタに対して多角的に評価する視点を持つきっかけとなったことである。実際に自分たちが制作したカルタで子どもが遊ぶ姿を目の当たりにしたことで、作り手の思いだけではなく、使い手となる子どもの目線を考慮する意識が強まり、より適した教材を考えていく大切さを学ぶことができたと考える。特に、まだ文字を読めない子どもでも楽しめるカルタづくりの必要性、どのようにしたら子どもに「伝わるか」ということを保育者の視点で考えることの重要性に気づいた意義は大きい。また、活動を通して、子どもの食に関する知識の現状を把握する機会にもなり、今後、対象となる子どもの発達段階に適した指導媒体を考える視点を持つために有用な活動であったことが示唆された。

第三に、指導案を実践できる場が得られ、活動中の気づきから各科目の学習内容を関連させ総合的に学ぶことができた点である。特に、机上の空論で終わりがちな「教育課程論（就学前）」の授業での指導案作成が、より現実味を帯び、さらに実践後の振り返りもできることで、学生も意欲的に取り組むことができたと考える。その中で、子どもが楽しく活動できるよう、主活動のねらいやそれに伴う「導入－展開－まとめ」、環境などの構成を意識して、「実習指導案」を作成することを重要視した点について、「子どもたちが楽しめる活動であった」との協力保育所の主任からのコメントからもあるように、一定の評価ができると考える。一方で「お手付きに対するルールを徹底させた方がよい」や「子どもがとりやすいようなカルタの配置」、「子どもに伝わるような言葉を選んだ声かけの工夫」といった指摘から、「展開」について、子どもに伝わる

ようなルール説明や声かけを想定することが望まれる。これは、隈元（2009）の「学習指導案が発問や板書計画、ノート指導と密接に連動していること」にも示唆されている。この点においては、実践後の振り返りで「同年齢を担当するグループどうして話し合いをして共通ルールを検討する方がよかった」と反省していることから、学生自ら気づくことができたことは大きな成果と言えよう。また、「終わり方」についても、「導入—展開—まとめ」のまとめを意識することの大切さを感じたと思われる。これは田宮（2009）の「学習指導案作成を試みさせることで、その難しさを体験し、重視すべき視点や授業を計画するための必要な取り組みなどに気づかせる効果」に裏づけられよう。

このように、学生にとって、実践の場があったからこそ気づけたことが多くあり、智原・下口（2012）の述べるように、「保育者を目指す学生が保育の現場での実践力を習得するには、授業科目の枠を超えた実践活動への取り組みが重要であること」を意味し、連携した科目相互に意義があると思われる。

また、今回のカルタ制作において工夫した点から考えると、活動の積み重ねによる改善、すなわち、PDCAサイクルの「A（改善）」が直接的な形で現れていると解釈できる。このように、実践ができる環境のもと、その実践に向けた指導計画を想定し、その上で実践を試み、さらに振り返りを行うことで、これまでの一連の活動の評価が可能になる。「PDCAサイクル」のもと、連携した科目相互にプラスの影響が望まれる。

おわりに：今後の課題と展望

保育所でカルタ遊びを実践する機会を得て、学生の振り返りに指導計画・実践に関する項目が加わり、実際の活動の中で子どもの反応から得られた気づきの重要性が示された。一方で、食育に関する記述は著しく減少した。指導案の中で、活動のねらいを「食材について学ぶ」「地域の食べ物について触れ関心を高める」「食べ物の特徴や産地の理解を深める」と食育の観点から設定していたにもかかわらず、多くの学生が「カルタ遊びを楽しんでいたかどうか」を活動の振り返りの基準として重視していたと推測できる。今回の振り返りで使用したシートは、従来と同様にすべて自由記述の形式であったが、実践の機会を得たことから、学生の振り返りの対象が教材としてのカルタだけではなく、保育者としての活動や子どもたちの反応も加わって、振り返りの対象が増えて多岐にわたるようになった。今後は、振り返りの方法を再考する必要があると考える。

また、繰り返し遊ぶというカルタの特性上、カルタを用いた活動の成果を1回の実践で評価することは困難である。今年度の学生の振り返りの中には、「読んだ札の食べ物を聞いてすぐ絵札を取る姿が見られた。読み札を最後まで聞いていない場面が多かった」「一緒に読み札を読んでもらうことで、さらに食べ物への理解を深めることができたのではないかと感じた」「子どもたちが取った後、どんな料理なのかふりかえるとさらに子どもたちの印象に残ると考える」という記述が見られる。活動のねらいにも関わらず、カルタは繰り返し楽しむものであるから、まだ文字の読めない幼児に対しては、料理や食べ物の理解を促進しようと意気込まず、様々な文字や言葉に

触れる体験だけでもよいと柔軟に捉えてもいいのではないかと考えられる。「言葉の獲得に関する領域『言葉』」として保育所保育指針(2017)にも次のように述べられている。「子どもが生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること」(第2章 保育の内容3 3歳以上児の保育に関するねらい及び内容)また、保育所保育指針解説(2018)には、「子どもは、遊びや生活の中で様々な言葉に出会い、その響きやリズムに興味をもったりする。やがて、その意味や使い方にも関心をもつようになり、いろいろな場面でその言葉に繰り返し出会う中で、徐々に自分が使える言葉として獲得していく。」とある。文字が読める、読めないにかかわらず、遊びを通して言葉と出会い、言葉に対する感覚を豊かにするためのカルタ、そのようなカルタはどのようなものか、子どもたちの反応を見ながら、学生たちが試行錯誤しながら学びを深めていくことが望まれる。今後は、カルタ遊びを繰り返し実践し、言葉の獲得、食への興味の変化、知識の獲得の様々な視点から長期的な効果を評価していく必要があると考えた。

【注】詳細は次の論文を参照。鳥居美佳子・古屋祥子・山田千明(2017)「食育カルタ制作—保育内容複数領域の科目連携授業の試み—」山梨県立大学『山梨県立大学人間福祉学部紀要』第12号、68-82

【引用文献】

・隈元浩二郎(2009)「学習指導案作成の手掛かりとなる模擬授業の追究—総合講義「教職実践研究Ⅰ」の実践を通して—」鹿児島大学教育学部教育実践研究

紀要, 19, 279-290.

- ・厚生労働省(編)(2018)『保育所保育指針解説』フレーベル館
- ・田宮弘宣(2009)「学習指導案作成を取り扱った授業についての考察—ビデオ視聴を活用した授業実践—」鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 19, 273-278.
- ・智原江美・下口美帆(2012)「大学における科目を連携させた授業の取り組み—「図画工作」と「幼児体育」の授業実践報告3—」京都光華女子大学短期大教育学部研究紀要, 50, 67-85.
- ・村上陽子(2018)「小学生における食感覚を表すオノマトペの認知と食嗜好性」静岡大学教育実践総合センター紀要, 28, 200-210.

**Play *Karuta* (Picture Cards for a Traditional Japanese Game)
for in a Day Care Center, and the Making of Such Cards by
University Students in a Kindergarten
Teacher and Child Care Worker Training Course**

Mikako Torii¹⁾ Shoko Furuya¹⁾ Tatsuya Satomi¹⁾ and Chiaki Yamada²⁾

Key words:

Integrated Class, *Karuta* (Picture Cards for a Traditional Japanese Game) , On the curriculum of education, Arts and Handcrafts, Food and Nutrition Education

1) Yamanashi Prefectural University 2) Saitama Prefectural University